

令和7年度カタクチイワシ対馬暖流系群資源評価会議 議事概要

日時：令和7年9月17日(水) 13時～15時40分

会場：水産研究・教育機構長崎庁舎 浮魚資源部 副部長室およびWEB会場

参加機関：18機関 参加者：58名（有識者含む）

【会議要約】

- ・今年度の資源評価では、2024年の資源量、親魚量ともに減少して過去最低を更新。2024年の親魚量は限界管理基準値以下で、2023年および2024年と連続して低い加入が続いている。
- ・2024年の漁獲量は過去最低となり、2025年の漁模様も今のところ良い情報は少ない。
- ・資源の減少について、自然死亡係数 M の変化や産卵場の縮小などの分布の変化も影響している可能性があるが、この点に関する科学的知見は不足している。

（以下、発言は要約。順番を入れ替えている場合もある。）

【水研からの説明】

担当者：長崎県の中小型まき網 CPUE 以外で適切だと考えられる資源量指標値はあるか？

参画機関：現状ではなさそう。魚が獲れない中での資源評価の難しさを感じている。

参画機関：マイワシやカタクチイワシなどで「増える時は増えるし、減る時は減る」と言われるのは、 M （自然死亡係数）が変化していることも要因の一つと考えられるので、 M が変化するモデルについても是非検討いただければ。

座長：現在使われている M は実際よりも低い可能性がある。また、時間的に変化する M を推定することは簡単ではないが、今後の重要な課題と認識している。

【2025年の漁況】

座長：それぞれの府県での2025年の漁況について確認したい。

参画機関（鹿児島）：前年より漁獲量は少なく、過去十年で最低と予測される。

参画機関（熊本）：前年割れ。直近（ここ2、3カ月）も水揚げは悪いという状況。

参画機関（長崎）：漁獲は落ち込んでいる。昨年も非常に落ち込んだが、今年は昨年より若干少ないという状況。昨年の秋以降漁獲が伸び悩んでいるので、このまま獲れずに終わるのではないかと考えている。先月からマイワシを獲っている。

参画機関（山口）：昨年も取れず、今年はさらに悪いという状況。棒受網などでは少し前までマイワシ、現在はウルメイワシを漁獲している。

参画機関（島根）：カタクチはマイワシと対照的で水揚げが悪く、マイワシが漁獲のほとんど。

参画機関（富山）：昨年の漁獲は非常に少なかったが、今年は昨年の 2.5 倍くらい。しかし平年より少ない。7 月上旬に実施しているトロール調査では、カタクチが昨年から獲れなくなってきている。日本海北部でも資源状況は悪いのではないか。

参画機関（鳥取）：漁獲のターゲットに関して、境港のまき網ではサバやマイワシ等の増えている資源に努力量が向いている可能性がある。

座長：カタクチが見えているが獲っていない可能性はあるか？

参画機関（鳥取）：特に見えているわけではないと思う。

参画機関：サバがカタクチを捕食しているのではないかという漁業者の声がある。実際に胃内容物からも確認された。

座長：今年の産卵量についてはどうか？

水研：2025 年の産卵量は 2024 年同様に少ない。2025 年 6 月に九州近傍でまとまった産卵があったが、局所的なものか。

【資源が減少した原因】

有識者：非常に厳しい状況であるといえる。近年 1、2 歳に対する漁獲圧が高まっているとの評価結果だが、本当にそうだろうか。レトロスペクティブ解析の結果を見ると、資源量、資源尾数、加入量が下方修正されるケースが続いており、自然死亡率の上昇など何かあったのかもしれない。また、分布域が変化してきている可能性も考えられ、現在は沖合よりも沿岸域に張り付いた分布となっているのでは。韓国や中国の漁獲量が日本よりかなり多いことを考えると、分布の中心はそちらにあり、日本は縁辺部と捉えることもできるかもしれない。好調なマイワシやウルメイワシとの関係、漁業の狙いの影響もあると思うが、それに加えて、自然死亡係数 M や分布域の縮小などの質的な変化も資源の減少には影響しているかもしれない。

座長：現在のところ、中国は別系群、韓国はつながっている可能性があると考えている。韓国の漁獲量は減ってはいるものの踏みとどまっている印象。日本だけ急減している理由がわからない。

有識者：資源量が多かったときの産卵場の分布はどうなっていたのか。

水研：資源が多かった 2007 年と少ない 2024 年や 2025 年を比較すると、産卵場が縮小しているのは一目瞭然であり、沖合から沿岸域に縮小していることが見て取れる。昔の別の調査でも沖合に多くのシラスが見られた。産卵場は 2021 年はまだ沖合にもあったが、その後の 2 年くらいで一気に分布が狭くなった印象。

有識者：F の図を見ると、漁獲が強くて資源を減らしたように見えるが、報告書に漁獲圧以外の要因として考えられることを盛り込んでみてはどうか。

座長：報告書の「その他」のセクションで記述できないか。

担当者：漁獲圧以外にも、環境要因に伴う加入の低迷や M が高いことによって資源が減少している可能性もあるかもしれない。

座長：Mが高いのなら、漁獲圧を下げたとしても資源状況が変わらない可能性を危惧している。

水研：一方でそういった記述は推察に過ぎず、論文などの科学的な根拠が乏しい場合もある。

座長：どの程度の強さで書くか。あくまで可能性の一つとして書いておくか。

水研：韓国や中国でも日本と同じような環境の変化がみられるといった情報はるか？韓国や中国では漁獲量があまり減っていない。日本の EEZ だけ環境が悪くなっているとは考えづらい。

担当者：報告書では今後の課題として記載し、研究調査が必要だという書きぶりでも良いかもしれない。

水研：マイワシ、マサバには良いけど、カタクチイワシには良くない環境はどんな環境が想定されるのか。シラスも獲れていないので、加入が悪いのが原因とみていいのでは。

座長：資源評価結果を見ると、資源量急減の原因として、2022年のFが高く、かつ2023年と2024年の加入が悪かったというダブルパンチが効いているものと最初解釈した。一方で、マイワシが増えたらカタクチが減るというイメージを持っている漁業者も多い。また、最近では漁船が減っているので、漁獲量も減っているという意見も耳にする。

水研：近年2歳魚の漁獲尾数が減っているの、それに応じてFが高くなっているのでは。漁業の形態が変わって、2歳魚はいるけど獲っていない可能性も考えられる。

担当者：成長が悪くなっている可能性もあるのでは。

座長：ここ10年ほどの2歳魚の漁獲の減少は、冬季の大型魚、いわゆる関東だれの沖合からの来遊がないことと関連していると考えている。その結果、1-2歳魚の漁獲圧が高く推定されている可能性はある。

水研：今回の評価結果では、データ間の齟齬などの問題もなさそうで、どういった課題があるのか理解できていない。例えば、加入が減っているのは過小推定だと考えているのか。そうであれば、将来の加入をどう考えるかは大きな問題になる。また動態が加入に強く依存するなら、別の管理規則を提案するのもありかもしれない。

座長：評価結果そのものに問題はないが、資源が減少している理由を漁獲圧の高まりと言い切れないところに悩みがある。もちろん漁獲圧を下げる必要はないというつもりはないが、漁獲圧以外の要因についても考える必要があると思っている。

水研：SH 会議等の想定問答として、外国の状況と日本の資源との関係についての漁業者からの質問にどう回答するか考えておく必要はありそう。

座長：カタクチイワシの系群をどう捉えるという問題でもある。韓国も少し減っているが、なぜ日本だけ極端に減っているかを整理する必要があると思っている。

参画機関：韓国の東側が減っていれば、日本と同じ傾向と考えられる。黄海に大きな資源があるという話もある。

水研：産卵場が日本の沿岸域に張り付いていることを考えると、日本の資源は別と考えてもいいのでは。

座長：今は分断されているかもしれないが、資源が多い時は分布域が広くつながっていたのかもしれない。

水研：同様の事例として、太平洋系群のマイワシが減少したときに最後に土佐湾に魚が残ったことを思い出した。大陸とのつながりについて、何か情報を持っていないか。

水研：黄海に大きな資源があるというのが中国、韓国の見方。特に中国の沿岸域に産卵場がある。基本的には沿岸域が分布の中心と見てもよい。

有識者：資源が少なくなると、限られた場所に分布するのは他の資源でも見られる。特に、資源が減る時は縁辺域から減っていくのが通常である。例えば、カツオは日本が縁辺域に当たるので、資源減少の影響を受けやすい。カタクチイワシ太平洋系群では、資源が減少すると、東北沖などの沖合回遊群が減って、西日本の沿岸群だけが残る。メタポピュレーションに基づく見方が必要ではないか。資源の増減に伴って地理的な分布が変化することは起こりうることだと考えている。資源が減っているのは間違いのないと思うが、その要因を本当に F が上がってきたことだけで説明できるのか。2010年代から F が上がっていたが、漁獲努力量が増えていたのか？

参画機関：煮干しとなるサイズを漁獲対象とする漁業の実態を考えると、努力量は一定もしくは減っていると思う。

座長：2023年のように煮干しの値段が高かった年は努力量が高まった可能性はあるが。

水研：昔太平洋でカタクチイワシが多かった時は、沖合回遊群が多かった。沿岸群は産卵期が長く、あまり大きく育たない。沖合回遊群は産卵期が短く、産卵せず成長する時期が長めで、より大型に、2歳、3歳まで成長する。資源が減って沿岸群主体になると、大型の魚がいなくなる。韓国のデータについては、月別・漁法別・地域別の情報を得ることはできるが、韓国語表記であることの難しさのほか、取得方法も変わり整理が難しくなったが、ブリでは取得して活用している。

座長：そのような情報の収集には今後トライしてみたい。

有識者：太平洋系群では質的に異なる群が出てくるが、そのような群がなくても、分布が広がる可能性はあると思う。また、太平洋系群ではマサバによる捕食が M に効いているという議論があった。資源の減少が F で説明するのか M で説明するのか。必ずしもカタクチ太平洋系群と同様に語れるわけではないが、F と M の間には逆相関があるため、注意してみていく必要があるだろう。

【2026年ABC】

座長：ABCとしては今回のベースケースのシナリオで問題ないか？2026年ABCの1.5万トンという数値は2024年の漁獲量よりは多いが、これまでの漁獲量と比べてかなり少ない。それなりにインパクトのある数字だと見ている。また、簡易版のまとめかたについて、担当者から低加入が続く場合と過去3年平均漁獲圧に基づく試算（チューニングなし）の2案が示されているが、どちらを提示するのがよいか。

参画機関：今回、新たに低加入が続くケースを示すより、去年と同じようにベースケースと過去3年平均漁獲圧に基づく試算を示す方が行政にも説明しやすい。

座長：承知した。その方向で考えたい。また「その他」の書きぶりについては、後日加筆して確認してもらおう。

【有識者による講評】

言いたいことは議論の中で述べた。難しい局面になってきたと感じている。